

第28回夏期福音特別集会(1)(梅ヶ島)

我は独りにて酒槽を踏みめり

――イザヤ書第44、53、61、62、63章他――

1981年8月21日

小池辰雄

生命賭けの求め 義と愛 十字架の予表 十字架を負いて我に従え 虚偽なき民 神も一緒に
悩み給う 聖霊エホバの霊 神さまの熱心 エホバよ汝はわれらの父なり 帰りたまえ 祈り

【イザヤ44】

6 エホバ、イスラエルの王イスラエルをあがなうもの万軍のエホバ如此いたもうわれは始なりわれは終なりわれの外に神あることなし。……なんじら懼るるなかれ憎くなかれ、我いにしえより聞かせたるにあらずや、告げしにあらずや、なんじらはわが証人なり、われのほか神あらんや、我のほかには磐あらず、われその一つだに知ることなし。

【イザヤ53】

5 彼はわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みずから懲罰をうけてわれらに平安をあたう。そのうたれし瘡によりてわれらは癒されたり。6 われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエホバはわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまえり。

【イザヤ61】

10 われエホバを大いによろこび、わが靈魂はわが神をたのしまん。そは我にすくい衣をきせ義の洋服をまとわせて、新郎が冠をいただき新婦が玉こがねの飾をつくるが如くなしたまえばなり。

【イザヤ62】

1 われシオンの義あき日の光輝のごとくにいで、エルサレムの救いもゆる松火のごとくになるまではシオンのために黙さずエルサレムのために休まざるべし。

【イザヤ63】

1 このエドムよりきたり緋衣をきてボツラよりきたる者は誰ぞ。その服飾ははなやかに大なる能力をもて厳しく歩みきたる者はたれぞ。これは義をもてかたり大いにすくいをほどこす我なり。2 なんじの服飾はなにゆえに赤くなんじの衣はなにゆえに酒槽をふむ者とひとしきや。3 我はひとりにて酒槽



をふめり。もろもろの民のなかに我とともにする者なし。われ怒りによりて彼等をふみ忿恚によりてかれらを踏みじりたればかれらの血わが衣にそそぎわが服飾をことごとく汚したり。4 そは刑罰の日わが心の中にあり、救贖の歳すでにきたれり。5 われ見てたすくる者なく扶る者なきを奇しめり。この故にわが臂われをすくい、我がいきどおり我をささえたり。6 われ怒りによりてもろもろの民をふみおさえ、忿恚によりてかれらを酔わしめ、かれらの血を流れしめたり。

7 われはエホバのわれらに施したまえる各種のめぐみとその誉とをかたりつけ、又その憐憫にしたがい、其おおくの恩恵にしたがいてイスラエルの家にほどこし給いたる大なる恩寵をかたり告げん。8 エホバいいたまえり、誠にかれらはわが民なり、虚偽をせざる子輩なりと。斯てエホバはかれらのために救主となりたまえり。9 かれらの艱難のときはエホバもなやみ給いて、その面前の使をもて彼等をすくい、その愛とその憐憫によりて彼等をあがない、彼等をもたげ昔時の日つねに彼等をいだきたまえり。

10 然るにかれらは悖りてその聖霊をうれえしめたる故に、エホバ翻然かれらの仇となりて自らこれを攻めたまえり。11 爰にその民にしえのモーセの日をおもいいで曰けるは、かれらとその群の牧者とを海より携えあげし者はいずこにありや。彼等のなかに聖霊をおきしものは何処にありや。12 栄光のかいなるモーセの右にゆかしめ、彼等のまえに水をさきて自らとこしえの名をつくり、13 彼等をみちびきて馬の野をはしるがごとく躓かで淵をすぎしめたりし者はいずこに在りや。14 谷にくだる家畜の如くにエホバの霊かれらをいこわせ給えり。主よなんじは斯おのれの民をみちびきて栄光の名をつくり給えり。

15 ねがわくは天より俯視なわし、その栄光あるきよき居所より見たまえ。なんじの熱心となんじの大能あるみわざとは今いずこにありや。なんじの切なる仁慈と憐憫とはおさえられて我にあらわれず。16 汝はわれらの父なり。アブラハムわれらを知らず、イスラエルわれらを認めず。されどエホバよ汝はわれらの父なり。上古よりなんじの名をわれらの贖主といえり。17 エホバよ何故にわれらをなんじの道より離れまどわしめ我等のこころを頑固にして汝を畏れざらしめたもうや。願くはなんじの僕等のためになんじの産業なる支派のために帰りたまえ。18 汝のきよきたみ地をえて久しからざるにわれらの敵なんじの聖所をふみにじれり。19 我等はなんじに上古より治められざる者のごとく、なんじの名をもて称られざる者のごとくになりぬ。



●生命賭けの求め

皆さんはいろいろな事情を乗り越えて、よくいらつしやいました。人生には大事な瞬間がある。これを逃すと、またそれは来ない。神の歴史は一回限りの、非連続の連続でいきます。いろいろな事情がありましようけれども、それを本当に振り切つて、あるいは身体の具合が多少悪くてもそのまま来られた。我々の集会はお説教ではない。キリストから生命をいただく、そういう集会です。私のようなボロ器を通して、神・キリストが示そうとしていらつしやることを、あなた方が私の言葉以上のものを聞いてくださる。それだけの気合で、皆さんは来られたと思います。どなたも、この集会を通して自分の今までの状態から突き抜けて、次元的にもより高いところへ昇る。それを生命賭けで求めていただきたい。必ず神さまは、キリストは、我々のそれぞれのつびきならない願いを——それは十把一かちげではない、一人ひとり違う——受けとつてくださると信じます。

やはり、集会というのとはできるだけ全参加を望みます、事情で止むを得なければ部分参加も仕方がないけれども。急に身体具合が悪くなつて来られなくなつた人もあります。他の事情で来れなくなつた人もあるし、いろいろです。もし、部分的であつても、今度はその部分を通して全体を把むだけの気魄が要る。決して、ただ分量ではない。要するに、どのような事があつても、全的ということが大事です。

「全的」

というのは、完全無欠ということではない。

「全存在をもつて」

ということですよ。聴くのも、耳で聴くのではない。身体で聴くんです。

聖書一卷あれば、行き詰まりを知らない人になる。聖書は大変な本です。聖書を二冊持っていたら、一冊は破り取つて、イザヤ書はカバンやハンドバックにでも入れて、いつでも読みなさい。とにかく、神の言に対しては気違ひにならなければダメです。普通の気ではダメです。

「神のためには狂えるなり」

とパウロが言った。どうぞ、そんな気合でやりましょう。

第三イザヤというのはイザヤ書の56章から66章までで、とてもこれは4、5回で語れるものではない。的を絞りまして、61章から66章までをやります。もちろん、その前のところにも時おり触れます。別に聖書の解釈をするのでなくて、聖書の言葉に聴き入りながら自在に語らせていただきます。

今日は63章から始めます。表題は

『我独りにて酒槽を踏み』

です。この一言は非常に私には個人的にもうったえる言葉です。私の藤井武先生も「我独りにて酒槽を踏み」というような先生でした。先生の『旧約と新約』という雑誌にそう



いう表題が載っている号があります。

実は、その号を私はカバンに入れて、ある病人を見舞った。川口愛子さんという人が、たった独りで寝ている友人の所へ見舞いに行く。

「先生も一緒に行ってください」

と言うので、二人で行きました。私はあんな病室は、荒屋というか、前にも後にも見たことがない。障子は破れ、畳はほとんど泥まみれ、そこにベッドで独りで寝ている。エリヤに鳥が食物を運んだように、牛乳を誰かが運んでくる。もう死を寸前にしている女のご病人です。私はその藤井先生の雑誌をその人にあげました。その人はそこで独りで酒槽を踏んでいた。多分、棺桶の中に一緒に入れて焼かれたでしょう。私の非常に大事な雑誌でしたが、上げました。川口さんと三人で生き別れの、生きている人と告別式をしました。そのことは『曠野の愛』のある号(第4、5号)に書いてあります。「主よみ許に近づかん」を最後に歌いました。私は病人を訪ねて、あのような非常に印象深いことはあと一遍もありません。けれども、その魂は本当に天に羽ばたいていきました。

人生は、皆さんお一人お一人、

「我独りにて酒槽^{さかづね}を踏みめり」

です。本当に人生を生きるひとはこの句が自分のものになると思います。

●義と愛

この63章というのは実に不思議な章です。

「このエドムよりきたり^{あかき}緋衣^{あかき}をきてボヅラよりきたる者は誰ぞ。その服飾^{よそおい}ははなやかに大いなる能力^{ちから}をもて^{いかめ}厳しく歩みきたる者はたれぞ。

「エドム」は――ヤコブ、エサウという――エサウの流れのもので、「赤きもの」という意味です。イスラエルの東南の方にある。その都が「ボヅラ」です。不具戴天の敵みたいなものです。これはこのエドムに対するところの審判らしい。「緋衣^{あかき}」というのは、酒槽を踏むと葡萄の汁が赤く衣に染まる。それと審判の血の色とを兼ねた言い方をしているわけです。

これは義をもてかたり大いにすくいをほどこす我なり。

ここで一人称で宣言している。このイザヤ書には、

「義と救」

という言葉が非常に対句になつて出てくる。特に第二イザヤ、イザヤ書40章からはそうです。これが新約にむかつて貫いている大事な、切つても切ることのできない言葉です。審判がなくて救済はない。義がなくて愛の救いはない。「義と愛」は離すことができない。

「義」というのは正義ではない。旧約から新約にいたるまで神さまは義を貫いています。また、愛も貫いています。狭い意味でいうと、イスラエルのために敵を裁いてくれる義、そ



してイスラエルを救ってくれる愛。そういう角度がもちろんその中にはあります。けれども、そういう角度をもつと乗り越えたものがこの預言者に示されつつあるところの義と救です。しかし、義は決してイスラエルの敵を審くだけではない。アモス書を読むと、愛するがゆえに、逆にイスラエルはもつとも激しく審かれている。

「私はただ汝のみを知る。だから、審くぞ」

というような言い方をしている。

サウロ、ダビデ、ソロモンの単立王朝の後、紀元前 933 年頃に北イスラエルと南ユダの二つの国に分かれた。北イスラエルの信仰的な危機のときにエリヤ、エリシャという預言者が出てきた。その後にアモス、ホセア、イザヤが出た。その後にエレミヤ、ダニエル、エゼキエルという預言者が出た。この後に第二イザヤ、第三イザヤがでてくる。第二、第三は要するにこのイザヤの弟子です。

いわゆる文書預言者の最初がアモスという預言者で、これは神さまの義を非常に強く主張した。それから、ほとんど同時に出てきたのがホセアです。これが神の愛を非常に深刻に語る。これが本当に不思議なんで、歴史的にそのように神の啓示がきているわけです。アモスを通しホセアを通して義と愛を神さまが示された。両方ともただ言葉ではない、生活そのものをもつて示された。

神と民、あるいは神と個人、イスラエルの神エホバとイスラエルの民、この関係がまっすぐに立っているのを「義」という。まっすぐに立つとは、神の御意がここにおいて成るということ。聖意が体現されること、それを義という。神の命令に対して、

「はい！」

と言ってそれを実行していく、これが義の姿です。神の言うことを——こつち（自分）は分らないけれども——「はい」と言って全面的にそれを肯定して、自分を否定してかかる。それを義という。みなこれは全面的です。聖意を肯定し、またそれに従うこと、それが義ということです。

これが誰もできない。キリストだけができた。イスラエルの歴史はこれをやりそこなって、惨憺たるものだ。それができないのを不信という。けれども、神さまは創ったものをどうしても救わざるを得ない、棄てない。もし、義をもつて審いたら、お終いですから。審きながら、どうしてもこれを救おうというところに救いがくる。義を通して救いがくる。神さまは怒っても、決して怒りっぱなしではない。愛すればこそその怒りだから。「神の怒り」という言葉は審判^{さびき}ということと同じです。審きながら救う。ただ「よし、よし」なんていつて救うのではない。その救いは今度は本ものになっていく。今度は、この義を、この関係をそのまま無条件に与えるというのが「愛」なんです。だから、

「これは義をもてかたり大に救をほどこす我なり」

とあるわけです。61 章 10 節に、



「¹⁰われエホバを大いによろこび、わが靈魂^{たましひ}はわが神をたのしまん。そは我にすくい^{うわぎ}の衣をきせ義の外服^{にいむこ}をまとわせて、新郎が冠をいただき新婦^{にいよめ}が玉こがねの飾をつくるが如くなしたまえばなり。」(イザヤ61・10)

とある。これも救いと義が出ています。62章にも、
「われシオンの義あさ日の光輝^{かがやき}のごとくにいで、エルサレムの救いもゆる松火^{たいまつ}のごとくになるまではシオンのために黙さずエルサレムのために休まざるべし。」(イザヤ62・1)

とある。これも義と救いです。これは同義語なんです。いわゆる大慈大悲ではない。そこに聖書の宗教の凄さがある。

●十字架の予表

²なんじの服飾^{よそおい}はなにゆえに赤くなんじの衣はなにゆえに酒槽^{さかふね}をふむ者とひとしきや。

どうしてそんなに酒槽^{さかふね}を踏む者と等しいように赤いのですかと。

³我はひとりにてをふめり。もろもろの民のなかに我とともにする者なし。われ怒りによりて彼等をふみ忿恚^{いきどおり}によりてかれらを踏みにじりたればかれらの血わが衣にそそぎわが服飾^{よそおい}をことごとく汚したり。

これは審判のことです。もちろん、預言者が霊示されたところの霊的な示しです。

⁴そは刑罰の日わが心の中にあり、救贖^{あがない}の歳^{とし}すでにきたれり。

ここにも

「刑罰の日、救贖^{あがない}の歳^{とし}」

とある。これが即ち「義と愛」です。愛は即ち贖い、贖罪の愛です。罪を贖うところの愛、贖罪愛です。神さまのすることは全的ですから、どんな罪を犯そうが、全部それを完全に贖ってしまっている。罪無き者とされているわけです。無罪です。我々は神さまの前には本当は死刑囚なんだ。ところが、これが無罪にされた。

⁵われ見てたすくる者なく扶^{たすかう}る者なきを奇しめり。この故にわが臂^{かひ}われをすくい、我がいきどおり我をささえたり。

結局、独りです。自分でみなやる。これはイザヤ書53章の、ひとつの逆説的な言い方をしているわけです。この

「独りにて酒槽^{さかふね}を踏んでいる者」

は、自分でもって葡萄の汁が飛び散る。今度は、自分の血を自分で浴びているような姿になる。それがイザヤ書53章なんです。

「⁵彼はわれらの愆^{とが}のために傷けられ、われらの不義のために砕かれ、みずから懲罰^{こらしめ}をうけてわれらに平安^{やすき}をあたう。そのうたれし瘡^{きず}によりてわれらは癒



されたり。⁶ われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。
然るにエホバはわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまえり。」(イ
ザヤ 53・5〜6)

「我等の不義のために傷を負って、その打たれし傷によって我等は癒されたり」
という言い方をしている。それに暗に響いてくる。

63章の中心は

「独り^{さかふね}で酒槽を踏んだ」

ということです。葡萄酒はイスラエルでは、キリストが言われた生命です。

「血は生命のあるところ」

で、イスラエル人にとつては、血を流すことは生命を取ることになる。これは創世記9章にも出ている。酒槽^{さかふね}を踏むと、血を流したように自分で浴びるわけです。相手を審くことを、今度は自分自身にその審判を負ってしまう。「独りにて酒槽を踏み」⁶ というのはその姿なんです。十字架の予表になる。

「たすくる者^{さかふね}なく扶る者なく、わが臂^{かひな}は自分をすくった」

という。これは旧約の預言者の声ですけれども、この預言者の響きは、イザヤ書53章と、そして今度は新約のキリストに響いてくる。

イエス・キリストが正に「独りにて酒槽を踏んだ」かたです。キリストがもし、回りのいろいろな不義の事態を、パリサイや祭司たちを審いたら、彼らはみな本当はどうにもならない。けれども、キリストはそれを全部、自分で背負って、地上において既に十字架を負いながら歩いてきた。そして最後に十字架に架かってしまった。「独りにて酒槽を踏む」という第三イザヤの預言は、イザヤ書53章から福音書のキリストの姿に一番響いてくるわけです。弟子たちもキリストと一緒に酒槽を踏むことができなかった。キリストだけが独りで酒槽を踏んだ。

「酒槽を踏む」ということは葡萄酒を造ることですから、生命をつくることと、生命の血を流すこととの二つの意味をそこにもっているわけです。彼は自分で自分の霊的な血を流しながら歩いてきたようなものです。味方は一人もいない。自分ひとり。しかし、ただひとりの味方が上からあった。神さまです。なぜ、キリストが独りで酒槽を踏めたかということ、神さまの方からいつも新しい生命が、霊の血が流れた。

●十字架を負いて我に従え
だから、

「十字架を負いて我に従え」

というのが「独りにて酒槽を踏む」ということです。

「苦難を負って、独りにて酒槽を踏んで来い」



と言われる。私はキリストの十字架を本当に身体で受けとったら、聖霊がやってきた。

「我れキリストと共に十字架せられたり」

と。これは本当です。これも全的に受けとらなければダメです。パウロは「十字架せられたり」と本当に全存在をもつて告白した。「十字架された」というのは

「私なんかもうありません」

ということ。無私というのは、ちよつとも偉いことでも何でもありません。自分がないんです、十字架されてしまったんだから、死んでしまったのだから。ところが、パウロはそのあとで何と言ったかというと、

「キリストわがうちに在りて生きたもうなり」

と言った。「天界のキリストが自分の中で生きる」とは何ですか。

「キリストの霊が、聖霊なるキリストが私の中に入ってきました。十字架されたら、自分がすつ飛んだら、キリストが来て私の中で生きてくださっています」

ということ。これは世界中の人が何と言おうが、この事実を否定するわけにはいかなと、私はパウロと一緒に言います。人間小池は死にいたるまで罪びとにすぎません。けれども、その中にキリストが来ているから、この事実はどうにもならん。だから力がくるんです。これはいわゆる意識ではない。私はその聖霊の世界を体現して、不思議なことが起きた。キリストの直弟子の、パウロ、ヨハネ、ペテロのインサイダーになったから、こんな有難いことはない。聖霊は何ものとも代えることができない。だから私は、

「原始キリスト道に、使徒的信仰に立ち帰れ」

と言っている。預言者たちは本当に「帰れ、帰れ」と言っている。帰り行くことが本当の前進である。

使徒たちがその書翰と使徒行伝で証している、その次元とその質に私が救われつつあるから、ありがたくてしょうがない。人に何と言われようと、私はいくらけなされようと一向差し支えない。私はキリストを生きている。私は

「キリスト！」

という一言を言うだけで異言の世界にすぐ入ってしまう。キリストは大変なひとだから。

皆さん、天界のパウロ、ヨハネ、ペテロと親友になってください。そういった絶対次元の立体的な空間の中に生きること。自分をみたり、人を見て、どうのこうの言っているうちはダメです。

「独りにて酒槽を踏み」

ような生き方は、なにも特に孤独になるということではない。大いに皆さんと親しんでください。けれども、我々一人ひとは「独りにて酒槽を踏んでいる」ような実存にならないければ、本当の驚くべき和にはならない。一人ひとりが全集会を、全召団を背負っているような存在にならなくては。聖霊はその力を持っている。老若男女を問わない。もう、聖



霊に代えるものはないですから。これは説明できない。

だから、イザヤ書63章のわけの分らないようなこの言葉が何だか知らないけれども響いてくる。そうだと。エホバか、エホバの使いか、預言者か、これは何を言っているか分からない。それが預言というものなんです。どの註解書を読んだって、大したことは書いてない。

●虚偽なき民

⁶われ怒りによりてもろもろの民をふみおさえ、^{いぎどおり}忿恚によりてかれらを酔わしめ、かれらの血を流れしめたり。

⁷われはエホバのわれらに施したまえる^{もろもろ}各種のめぐみとその^{ほまれ}誉とをかたりつけ、又その^{あわれみ}憐憫にしたがい、其おおくの^{めぐみ}恩恵にしたがいてイスラエル家^{いづくしみ}にほどこし給いたる大いなる恩寵をかたり告げん。

今度は全然別なことになっている。これはつながりはない。6節でもって一遍切れてしまう。7節からは、恵みのことをさんざん書いている。切れてるけれども、実はこれは相照応している。さきほどは義にあるところの十字架で、今度は贖いの愛が出ている。

⁸エホバいいたまえり、誠にかれらはわが民なり、^{いっわり}虚偽をせざる子輩なりと。

斯てエホバはかれらのために救主^{すくいぬし}となりたまえり。

「かれらは」と書いてあるのは、「なんじら」と読んでください。「^{いっわり}虚偽がない」ということは非常に大事なことです。

孔子(紀元前551〜479)が35歳のときに周に遊学にでかけた。そこに老子がいた。すると老子は、^{りようこ}「良賈は深く蔵して^{むな}虚しきが若く、君子は盛徳ありて容貌愚なるが若し」と言った。

「良い商人というものは良い物をたくさん深く蔵して何も無いような顔をしている。実は奥の方にたくさん良いものがある。君子は徳があるけれども馬鹿面をしている。お前さんは大分体裁良いような顔をしているようだが、そいつはやめたほうがいいよ」

というようなことを老子は孔子に言った。体裁は偽りなんです。あるがままであることが一番大事なんです。

キリストが一番好きだったのはあるが、^{いっわり}まの姿です。つくろっているのは嫌いなんだ。それはみな偽りです。いわゆる嘘ではない。嘘はなおさら悪いに決まっています。あるがままということです。行き詰まっているなら行き詰まっています。分裂なら分裂のまま、傲慢なら傲慢のまま、あるがままにそこにさらけだす。キリストはそういう人を

「^{いっわり}虚偽なき民」

という。あるがままの自分をそのまま体当たりしていく。それはキリストは必ず救います。

「偽善なる学者・パリサイ人」



というのは、あるがままからおおよそ反対の世界です。当時の祭司や教法師はみなそうなんだ。女の方は化粧してもいいよ、けれども、魂は、心はあるがままがいい。

それで、孔子が老子にやられた。孔子は弟子たちに老子のことをこう言った。

「鳥は能く飛ぶ。魚はよく遊ぶ。獸は能く走る。しかし、走るものは網を以て捕らえ得る。泳ぐものは糸をもて釣ることを得る。飛ぶものはいぐるみにかけて捕らえ得る。然れど竜にいたってはその風雲に乗じて天に昇るを知り得ず。老子は謂わばこの竜に比すべきか」

老子というのは竜みたいな人で、瓢々として捕らえ難い人物だと言ったという。

モーセの十言に、

「汝殺すなかれ。汝姦淫するなかれ。汝盗むなかれ。汝偽るなかれ、汝貪る

なかれ」

とある。盗むのは物を盗むのだけれども、偽るのは人の人格を傷つけるようなことになる。ある意味では、かえって偽りの方がなお罪が重いような気もする。

ここで「虚偽なき民」とは、あるがままに自分をさらけだす民であるということ。あなた方は、今度の集会ではイザヤ書を通して聖書に、神の言に、キリストにあるがままにぶつかってください。

●神も一緒に悩み給う

9 かれらの艱難のときはエホバもなやみ給いて、その面前の使をもて彼等を

すくい、その愛とその憐憫によりて彼等をあがない、彼等をもたげ

日つねに彼等をいだきたまえり。

「昔時の日つねに」とは「アブラハム以来ずっと」ということ。畳みかけて懇ろに神さまの顧み、愛を語っている。

「神さまは一緒に悩みを悩みとしている」

という。これは全く新約的な、新約でも出てこないような文句です。こういう文句はしっかり血となし肉となしてください。

「お前たちを私の義で審いたら、みな滅びてしまうから、この義をそのままやるよ」というのがこの愛なんです。「罪」というのは、神さまの言うことを聞かないのを罪という。何か

「この悪い事をした、この悪い考えをもった」

なんていうのは枝葉に過ぎない。そんなものは気にしなくていい。気にしなければならぬのは、神さまとの関係が、

「神さまに本心に『然り』と言って動いているか」

ということ。それができないから、



「義人なし、一人だになし」
という。

「降参しました!」
と、今度は参らなければダメです。平伏しです。そうすると、その「憐憫」^{いつくみ}がグーッと迫ってくる。

「汝らが訴えない前に私はそれを聞いている。呼ばない前から、もう答えている」
という。無門関に、

「声前一言、千聖不伝」

という言葉がある。声を発しない前の一つの言葉は、いかなる聖も^{ひじり}これを伝えるわけにいかないという。ところが、詩篇139篇を見ると、

「声前の一言は神さまはちゃんと知っている」

と書いてある。母親は、言葉の分からない小さな子供の心をちゃんと読んでいるでしょ、何を言わんとしているかを。そこなんです。白隠の句に、

「闇の夜に鳴かぬ鳥の声きけば生まれぬさきの父をしぞ思ふ」

とある。生まれぬさきの父が慕わしくてしょうがないという。

「尋ねよ、さらば見いださん。門を叩け、さらば開かれん。求めよ、さらば与

えられん」

とある。本当は逆なんだ。逆に、神さまの方でいつも求めている、尋ねている、叩いているんです。

「私がこんなにお前の魂の扉を叩いているのに、聞こえないかね。それに気付いたら、すぐ開けてやるよ」

ということです。「与えられん」というのはみな、

「私自身をやるよ」

ということですよ。

「願っているものをくれるか」

なんて思うけれども、そんな枝葉のことではない。キリスト自身を下さる。いいですよ、いろいろなことをお願いしたって。どうぞ、具体的にやってください。けれども、それよりも奥の世界を求めることが大事です。たまたま願いがきかれて、

「めでたし、めでたし。ありがたし」
ごりやく

なんて言っていると、ヘタすると御利益宗教になる。きかれないと今度は、「何だ!」なんてなことになる。

願いがきかれようときかれまいと、一番奥では神さまはちゃんと聞いている。こちらの求め以上に、神さまの方ではちゃんと与えつつある。だから、行き詰まりを知らない人になる。私は、



「自分の信仰なんかありません」

と言いたいくらいです。「自分の信仰」なんて、信仰も私しない。何もない。グーツと上から来るだけ。この境地に入ったら本当に楽しい。讃美歌ができてしまっしょうがない。聞こえてくるから。〔註 1981 年の一年間に計 20 歌を作詞した〕

上からの本願の力、「本願の効力」が——これは親鸞の言葉です——やってくるから、圧倒される。圧倒されながら、力がグングン出てくるから、とても楽しい。

「小池先生はなぜあんなに元気なのか？」と聞かれる。

「キリストという元の気をいただいているからです。私の元気ではない」と。キリストという、神さまという元の気です。

どうぞ、皆さん、もっとバカになってくださいよ。みな、意識過剰だから。私みたいに単細胞になってください。こんなバカなことを言う牧師さんや聖書の先生なんかいないね。皆さんはよくこのバカなことを聞いているよな。けれども、老子が言ったように、「大愚」なんだ。大愚大無の世界。無即無限無量ということになるわけです。この部屋の空気はこれだけの空間しかないけれども、外界の空気と、無限なる空間と相通じているから、我々は窒息しない。有限即無限の世界なんです。

「有限が無限を抱く、これ哲学することなり」と、岩本先生の有名な言葉がある。

●聖霊エホバの霊

10 然るにかれらは悖りてその聖霊をうれえしめたる故に、エホバ翻然かれらの仇となりて自らこれを攻めたまえり。

こんなに憐れんでいるのに、聖霊を憂えしめたから、受けとらないから、これを攻めたという。民数紀略の 11 章に出ています。せっかくイスラエルが出エジプトをしてあの荒野の旅をしているのに、そして深く顧みているのに、偶像を作って背いているから、神さまの方も今度はやりきれなくなつて怒りだした。

11 爰にその民にしえのモーセの日をおもいいでて曰けるは、かれらとその群の牧者とを海より携えあげし者はいずこにありや。彼等のなかに聖霊をおきしものは何処にありや。

といって、反問している。

「お前たち、イスラエルの民がダメなんだ、本当はお前たちがいずこにありやだ」ということを逆説的な言葉で言っている。

「神さまはどうしたか？」

ではない。本当は、



「お前たちはどうしたか？」

ということです。それを預言者は逆な言い方をしている。ここに、

「きよきみたま聖霊、エホバの霊」

という不思議な言葉がでてくる。こういう言葉はあまり出てこない。「エホバ」というのは「実存主」ということです。「ヤーヴェー」というイスラエルの神さまの名前は「実存者」ということ。上から下に向かつて投じ出ることを実存^{いで}という。それから、「エホバ」という言葉の中には「アドナイ」「わが主」という言葉が含まれているから、私は両方合わせて、

「実存主」

と言っているわけです。「エホバ」を意味的に訳すと、「実存主」ということです。

「始めなり終りなり」

という言葉はイザヤ書にはあちらこちらに出てくる。特に第二イザヤに。

「汝らはわが証人なり」

これもイザヤ書に出ている言葉です。「我はアルファなり」というのは、

「我は創造主、創造神なり」

ということ。「我はオメガなり」は、

「我は完成者、宇宙万物を完成する者なり」

ということです。

内村鑑三先生は最後に、

「宇宙万物の完成を祈る」

と叫んで死んだ。内村鑑三というのはやはり魂の大きい人物です。若い人は内村先生のものを読みなさい。下らない本をたくさん読まないで、第一流の本をジックリと読んでください。そうすると、本当の落ち着きがでてくるから。私が信仰に入った最初は、『宗教と現世』という内村先生の本です。私は直ちに感激して、サイドラインを引きながら読んだ。そして、先生の話の聞きに行った。17、18歳から25歳くらいまでは非常に大事な時です、感激性の非常に純粋な時ですから。まっすぐにそういう第一流のものを見ていってください。

昔の漢文の本に、

「すべからく第一等の書に親しむべし」

という文章があった。第一等中の一等はこの聖書です。大ドラマです。シェークスピアも聖書一卷にはかなわない。これは神さまがつくったのだから。著者は神であり、主人公はキリストである。流れているものは聖霊の波、聖霊の風だから。誰が何と言ったってしょうがない。それはいろいろ書き損ないはあるでしょう。そんなことはどうでもいいんだ。

●神さまの熱心

¹² 栄光のかいなをモーセの右にゆかしめ、彼等のまえに水をさきて自らこ



しえの名をつくり、¹³ 彼等をみちびきて馬の野をはしるがごとく蹟かで淵を
すぎしめたりし者はいずこに在りや。¹⁴ 谷にくだる家畜の如くにエホバの霊
かれらをいこわせ給えり。主よなんじは斯おのれの民をみちびきて栄光の名
をつくり給えり。

過去の恩寵をまた言っているわけです。申命記 32 章にモーセの歌がある。

「¹⁰ エホバこれを荒野の地に見、これに獣の吼る曠野に遇い、環りかこみて之
をいたわり、眼の珠のごとくにこれを護りたまえり。」

とは、イスラエルの民のことです。

¹¹ 鷲のその巢雛を喚起しその子の上にまい翔けるごとくエホバその羽を展て
彼らを載せ、その翼をもてこれを負いたまえり。」(申命記 32・10～11)

と。素晴らしい詩的な言い方をしている。神さまは民を神の驚くべき翼に載せて旅をした
のだよと。イスラエルの人たちは、神さまを非常に具体的に描く。しかも偶像にはしない。
そこが素晴らしい。

今度は畳みかけて書いてある。

¹⁵ ねがわくは天より俯視なわし、その栄光あるきよき居所より見たまえ。
なんじの熱心となんじの大能あるみわざとは今いずこにありや。

これも反語的な言い方です。

「なんじの熱心」「神さまの熱心」

が大事なんです。こつちの熱心ではない。

「あの人は信仰が熱心だ」

なんて誉めるけれども、ヘタすると危ない。自分の側の熱心なんてのはそのうちにちよつ
とおかしくなったりする。パリサイ・パウロが自分の側の熱心だった。キリストを信じる
者を迫害していた。

「こいつは仕方がない野郎だ」

と、キリストはダマスコ途上で彼をとうとうひっくり返してしまった。それで、パウロは
今度はキリストの熱心に変わってしまった。

「自分の熱心なんてものは塵芥だ」

と言った。

いいですか。皆さん、そこを切り替わってくださいよ。「求めよ」と言うけれども、皆さ
んは神さまの方で求めていることに気がつかないと。自分の悲願でなくて、神の本願に、
キリストの本願に気がつかないと。

「あなたはこんな者をそんなにまでも棄てないでいるんですか。忘れないでくだつ
さっているんですか、あなたは」

と、たまらなくなつて平伏してしまう。自分の側はダメなほど、神さまは顧みてくださる。



私たち一人ひとりがキリストに、

「我れ汝を愛す。棄てないぞ、お前を使うぞ」

と言われる。とにかく、キリストの力が来なかったら、本当の意味で何もできませんよ、できたような顔をしているけれども。いいですよ、できたような顔をしたって。けれども、それが間違っていたことに早く気がついてくれなければ。

人間というのはいろいろな要素がある。そんなものを整えようとしたって無理です。人間そのものはみな非常にドラマチックな構造をもっているんだ。そんなものを整えようと、一生懸命で自分で潔くなろうとか、正しくなろうとする。ダメですよ、そんなことは。キリストを受けとってください。そのドラマチックなのが今度は、もの凄く驚くべき調和をもってくる。何を読んでも、何をしても、楽しくてしょうがない。どんどん消化してしまう。大体、大きな魂はいろいろな要素を持っていて、その一つ一つを本当にいろいろな展開していく。ベートーベンであろうと、ゲートであろうと、質的に第一級な人はそうなんです。

勝海舟に紹介されて、坂本龍馬が西郷南洲に出会う。南洲という人は何かボーツとしていて、つかみようがない。そこで、龍馬が何か大きなことを聞いた。

「大きく叩くと南洲は大きく答える。小さく叩くと小さく答える」

と。さすがに龍馬も南洲を解したといつて、勝海舟が喜んだという。あの頃の魂はみな凄いな。

ある一つの型にはまったものではない。私は全然、型がない。よく典型的なものがあるね、「こういうように言わなくてはいかん、こういうように祈らなくてはいかん」

と。嫌だよ、そんなのは。あなた方は勝手にマイペースで祈ってください。しかし、そのマイペースはキリストに即していなくてはいかん。路が——皆が歩く一人ひとりの路はみな一人ひとり特殊な路なんだ——それが天道に、キリストという天道に即すると、それが本当の道路ということですよ。

●エホバよ汝はわれらの父なり

なんじの切なる仁慈いつくしみと憐憫あわれみとはおさえられて我にあらわれず。

「なんじの切なる仁慈と憐憫を留保しないでください」というようなことが書いてある。

16 汝はわれらの父なり。アブラハムわれらを知らず、イスラエルわれらを認めず。されどエホバよ汝はわれらの父なり。上古いにしえよりなんじの名をわれらの贖主あがないぬしといえり。

ここに珍しく

「父」



という言葉がでてくる。とにかく、このイザヤ書というのは大変なものだ。こういうのをキリストは読んでいらつしやるから、神さまのことを

「父よ！」

と言われる。キリストは本当にイザヤ書を愛読されたでしょうね。新約聖書からイザヤ書を除くと、随分、穴があいてしまう。それくらい、イザヤ書が引用されている。

「お父さん！」

というわけです。「父よ」でも、

「主よ！」

でもいい。非常に自由になる。そして、生き生きとした世界です。どんなことがあっても、神さまがキリストにあつて贖わないものは一つもない。だから、クリスチャンは自殺はしない、絶望はしない。自分にはききつと絶望しなさいよ。けれども、キリストには逆に今度は本当に100%の希望だ。

「何かしらないが、力が出てきました、楽しくなりました」

ということになる。イザヤ書に、

「楽しめ、楽しめ」

と書いてある。快樂説だ。そこらの快樂とはちがうよ。

● 帰りましたえ

17 エホバよ何故にわれらをなんじの道より離れまどわしめ我等のこころを
かたくな 頑固にして汝を畏れおそざらしめたもうや。

なんて、神さまに向かつてさんざん勝手なことを言っている。ということは、預言者は彼らのマイナスの心を逆説的にこう言つて、神さまに迫っている。本当はこれはみな信頼している言葉です。

「あなたのその顧みは、なぜ逆に民は本当に知らないのか」と逆に言っている。

願くはなんじの僕等のためになんじの産業なる支派やからのために帰りましたえ。

今度は、

「神さまの方から帰つて来てください」

なんて言っている。

「帰つてきてください。私はあなたの所へ帰つていきませんから、あなたが帰つてきてください」

と。これは図太いね。しかし、これが本当の信仰なんです。

「お願いしますよ、帰つてください、来てください。私は動けませんから。尻もちをついてしまつて、どうにもなりません」



と。放蕩息子がボロな姿でお父さんのところに帰ってきたね。そうしたら、

「お父さんはこれに走り寄って」

と書いてある。放蕩息子の帰る足取りよりも、お父さんが放蕩息子に迫って行った足取りの方が速い。レンブランドは、門の所で迎えているような絵を書いたのは間違えた。あれは、お父さんが走っていくような絵を書かなくては。レンブランドは本当は精神を間違えた。大画家もその精神はつかみそこなつた。サマリヤの女と井戸端でキリストが話している絵もなかなかおもしろい絵だけれども。

小さな子供がひっくり返って泣いてしまつて動けなくて、

「お母ちゃんー！」

とやっている。それが「帰りましたまゑ」なんだ。「神さまが帰ってくる」ということは、神さまが天降ること、天から降ってくることです。降臨です。「帰りましたまゑ」とは、

「降^{くだ}つてきてください」ということ。

「我れ彼らの苦しみを見るがゆゑに降^{くだ}りゆかん」

とエホバの神はモーセに言つた。キリストは天から降ってきました。「自らを投^いじ出る」「エクスティレン」[実存]という字です。神さまの方から投^いじ出てくださいる。

「帰りましたまゑ」

とは具体的な本願の姿を願っている。その姿を見たら、今度は本当にこっちは飛び上がるようにして進んでいける。動けなかつたと思うものが、上からの吸引力みたいなもので動きます。

18 汝のきよきたみ地をえて久しからざるにわれらの敵なんじの聖所をふみに
じれり。19 我等はなんじに上古より治められざる者のごとく、なんじの名を
もて称^{とな}えられざる者のごとくになりぬ。

と。

「誠に情けない事態でございますが」

と言つて代弁しているわけです。

「なんじの名をもて称られ」

とある。私たちは、キリスト者というのは、

「御名をもて称えられている者」

です。キリストの有^もです。アルファにしてオメガなるもの。

「我はアルファなり、オメガなり。汝らはわが証人なり」

とは第二イザヤ書に出ている。

「6 エホバ、イスラエルの王イスラエルをあがなうもの万軍のエホバ如此^{かく}い
たもうわれは始^{はじ}なりわれは終^{おわり}なりわれの外に神あることなし。……8 なんじ



ら懼るるなかれおのなかれ、我いにしえより聞かせたるにあらずや、告げしにあらずや、なんじらはわが証人なり、われのほか神あらんや、我のほかには磐いあらず、われその一つだに知ることなし。」(イザヤ 44・6…8)

とある。神は「アルファにしてオメガ」——創造者にして、最後の救済完成者——である。

「帰りましたまゑ、天降りましたまゑ」

という。天から降ってきてくださいと。キリストのもとに帰り行くことが前進である。それは帰り行くばかりではない。今度は帰入、帰り入らなくてはいいかん。そして祈り入ること、祈入、全身を投ずることです。そうすると、全身が熱くなる。

これから真剣に祈ります。それも、エホバの熱心で祈る。キリストの霊に全托してください。

● 祈り

旧約の歴史に自らをエホバの神として顯れたまいし、まことのおん父さま。第一イザヤ、第二イザヤと、イスラエル・ユダの国の滅亡のときから捕囚のときを通し、やがてネヘミヤによるところの第二神殿、紀元前 516 年からエズラの宗教改革、44 年に及ぶその間におそらく出たという第三イザヤのこの預言の一端を承り、それが決して今から 2500、2600 年前のことではなく、私たちに現に迫るところの主イエス・キリストの御言の隠れた、その驚くべきあなたの御言は御業に今、圧倒されました。

「われ独りにて酒槽さかぶねを踏み」

と、主さま、あなたは本当にこのイザヤの預言のごとく独りにて酒槽を踏み、その腕をもつて義を現し、憐れみを現したまいました。ついにそれは十字架において自らの血を浴び、私たちを贖いとおつてくださり、聖霊の驚くべき生命を私たちに与えてくださり、かくして、私たちはあなたの絶対恩寵に圧倒されます…(異言)…主さま、どうぞ、この兄弟姉妹たちはこの山奥に、あなたのみ懷の中にそのようにして入れられ、その一瞬が即ち百日にも当たるような、そのような大事なときを今、私たちはじりじりと味わわれております。どうぞ、かくして、私たちはあなたが本当に

「我は始めにして終りなり、創造にして完成するものなり」

と、驚くべき個人の顧み、また歴史の顧みを力強くなしてくださるところの主さま、どうぞ、この一人びとりが本当に主にあつて独りにて酒槽を踏むだけの力をいただき、また恵みをいただき、人を本当に救いあげるところの聖霊の力をいただき、進んで行きます。私たちは、かくして、あなたの証人あかしびととなります。どうぞ、一人びとりが天下一品のものとして、することなすこと人の目にはどう見えようと、あなたの天界には本当に本当の歴史の一頁、一頁を綴らしめられるところの生涯であることができますように願ひ奉ります。私たちは破れ器です。しかしながら、この破れ器を通して、あなたが…〔録音切れ〕……

